

所功著

『お伊勢さんの式年遷宮と』

廣池千九郎』

竹中 信介

はじめに

平成二十五年（二〇一三）、先の東日本大震災から二年を経たこの年、日本は経済面、政治面、文化面と様々な場面において岐路にあった。富士山の世界遺産登録、二〇二〇年の東京オリンピック招致等を経験した平成二十五年は、様々な変化の年であったと言える。

そんな中、日本はもう一つ、大きな文化的（精神的）岐路にあった。この年、全国各地から伊勢の地に多くの人々が足を運んだ。その数は神宮司庁の発表によると千四百二十万人を越え、実に人口の十分の一を越えた計算になる。日本は第六十二回神宮式年遷宮に沸き立った。

この年の六月二日、公益財団法人モラロ

ジー研究所（千葉・柏）にて開催された「伝統の日」において、皇室研究の第一人者でモラロジー研究所・道徳科学研究センター教授（研究主幹）の所功氏が、モラロジーの創建者・廣池千九郎（一八六六—一九三八）の著書『伊勢神宮』（一九〇八）及び『伊勢神宮と我国体』（一九一五）を手がかりに、神宮の起源、式年遷宮をその内容として講演（「学びの集い」）を行った。本書『お伊勢さんの式年遷宮と廣池千九郎』は、その講演をもとにまとめられた講演記録である。以下、本書の内容を順に紹介しながら、式年遷宮の精神から読み取れる「伝統継承」の精神の現代的意義を探ってみたい。

本書の構成

まず、本書の概観は以下のような構成になっている。

目次

刊行に寄せて

廣池幹堂

自序

— 廣池千九郎博士『伊勢神宮』の再発見 —

- 一、「伝統」は、常若の英知
- 二、廣池千九郎著『伊勢神宮』の出版
- 三、私家版の反響と増訂版の普及
- 四、「天祖天照大神」と「我が国体」
- 五、内宮の創立事情と実年代
- 六、外宮の創立事情と御饌殿
- 七、神明造と式年遷宮の成立
- 八、神宮で二十年ごとの総造替
- 九、遷宮の中断と民間奉賛の復興
- 十、毎年の神嘗祭と式年の遷宮祭

— 神宮の式年遷宮から学ぶこと —

近現代の式年遷宮と主な出来事  
皇大神宮と豊受大神宮の神域図

「伝統」とは何か

本書は一般に言われる「伝統」の意味を検討するところから説き起こされている。冒頭の重要な箇所を引用してみよう。この引用は、平成二十一年の皇后陛下の御大婚五十年（金婚式）に先だって行われた記者

会見におけるお言葉（詳しくは本書六〇七頁参照）を受けての所氏の言葉である。

それゆえ、私どもは表の型だけでなく、それに内の心が伴った伝統を大事にしたい。言い換えれば、表に見える型にとらわれて内に秘められた心を失わないよう、真心のこもった実のある伝統を大切に、活用したいと思えます。（七頁）

氏は、このように本来の伝統がもつともよく伝わっているところこそ、日本の皇室であり、皇室から祭祀を預かっておられるのが伊勢の神宮であると強調する。そして、ここに取り上げた引用こそが、本書に一貫する氏の主張であり、今後の日本が果たすべき役割を考察する上で鍵となる重要な概念である。この点に関しては、書評の終わりに再び触れることになるだろう。

そして、氏は日本の伝統を考えるにあたって、神宮及びその式年遷宮を手がかりに、「常若」(ever youthful) というキーワードを提示する。氏の「神宮は、常に古

くて新しい」（八頁）という表現が、もつともよく神宮及び式年遷宮の伝統を捉えた言葉であろう。この表現はまた、氏も指摘するように、イギリスの歴史家トインビーが「この聖地において、私はあらゆる宗教の根底にある統一性を感じています」という言葉によっても理解される場所である。

#### 『伊勢神宮』及び『伊勢神宮と我国体』の成立過程

ここでは、廣池千九郎著『伊勢神宮』及び『伊勢神宮と我国体』の成立過程という視点から、氏の主張を追っていききたい。

まず、『伊勢神宮』は、明治四十一年（一九〇八）に発刊された廣池の手による東洋法制史の立脚地から、神宮と皇室ならびに日本の国体との関係についての廣池の所見が陳述された書物で、私家版の形で諸家に献呈され批評が求められた。そしてこの増訂版が翌明治四十二年（一九〇九）、早稲田大学出版部から刊行され、大いに普及した。この増訂版は、氏によると「その内容は、伊勢神宮の単なる解説書ではあり

ません。まさに『我が国体の淵源を論述』することに目的があり、その具体例として『神宮の歴史・沿革・現状を記載』されたところに、大きな特色が見られます」（一二頁）ということである。氏は東京帝国大学教授の井上哲次郎博士の序文や、『古事類苑』編纂以来の恩師井上頼国博士の賞賛の言葉を引用し、当時の高評価を強調する。このように高い評価を得た『伊勢神宮』（増訂版）であったが、批判も少なくなかったため、廣池は数年思索を深め「神宮中心国体論」という論考を仕上げ、その論考を『伊勢神宮』（増訂版）の冒頭部分に加えることにした。こうして誕生したのが、『伊勢神宮と我国体』（一九一五）である。廣池は『伊勢神宮』（増訂版）の発刊後、「一種の宗教的信仰」を得、日本国体の淵源を天照大神の岩戸籠りの際に発せられた慈悲寛大・自己反省の徳に見出したことを、『伊勢神宮と我国体』新序「発刊の辞」において触れている。

『伊勢神宮』（増訂版）の教育界への影響先ほど『伊勢神宮』（増訂版）が普及し

たと述べたが、その理由は何であったのか。それは、明治四十二年という年が関係している。この年の十月に第五十七回の式年遷宮が斎行されたが、附説において、その遷宮の概要が説明されていたことが大きな要因と見られる。それに先立ち、文部省から全国の学校に対して「遷宮当日、伊勢神宮に関する訓話を行ふ」ことが通達されていたという。その参考書として全国各地の指導者らに求められ、予想以上の教育力を発揮したということであった。

さらに廣池は、進んで『伊勢神宮』（増訂版）を文部省関係者などに贈り、全国の学校で伊勢神宮について教育すべきことを要望していた。明治時代でも、そのころまで公教育の場ではほとんど取り上げられていなかったからであると、氏は分析している。そして、氏は遷宮の翌春（明治四十三年四月）から使用の国定『尋常小学修身書』卷二の十九に、初めて「クワウダイジングウ」が登場したことを取り上げ、それによって皇大神（天照大神）は、皇室の祖先神であり、日本人の敬拝すべき総氏神であることが、はっきり教えられることに

なった点に注目し、その意義の大きさを強調している。

#### 内宮と外宮の成立

まず、内宮の成立過程であるが、氏は『日本書紀』や最近の考古学の成果をもとに再構築された「古代史像」に関する議論（氏の師事する田中卓博士による議論）を参照し、次のようにまとめている。

このように見て参りますと、大和朝廷の数百年にわたる国内統一事業の途上、天照大神を祀るに最もふさわしい「うまし国」の伊勢が選ばれ、神宮（内宮）を創立されたことになりました。そこに建てられた「祠」とは、御神鏡（八咫鏡）を納めるホコラ（もと榎倉）でありましょうし、また「斎宮」とは、大神に仕える倭姫命が籠もられた宮殿を指し、その両方が海に近いイソ（イセの語源）にありましたので「磯宮」とも称されたものと考えられます。（二七頁）

このように述べつつ、その成立の実年代をおおよそ三世紀後半頃と推定している。

一方の外宮についてはいかがであろうか。宇治に祀られる内宮から約五キロ離れた山田に外宮が祀られているが、祭神の「豊受大神」は初め、丹波に祀られていた。それが、『止由気大神宮儀式帳』によると、雄略天皇（五世紀中頃）の夢に現れた天照大神の希望により、「度会の山田原」に遷ったという。ここであらためて「御饌殿」が造られ、天照大神の朝の大御饌・夕の大御饌を日別に供え奉ることになったという。ここで氏は、天照大神と稲作の関係が深い点に言及し、天照大神は稲作守護の役割を外宮の豊受大神に譲り、みずからは太陽のように万人・万物を照らす皇祖神としての神格を純化したことになるという見解を示している。

#### 「御饌殿」と「日別朝夕大御饌祭」

外宮で最も重要とされる「御饌殿」の「御饌」とは神饌、つまり神様の召し上げるものという意味であるようだ。「御饌殿」とはいわば神様の食堂であるというこ

とだ。神々の食事は古くから朝夕の二度丁重に行われてきたが、これを「日別朝夕大御饌祭」という。食材は、伊勢市内などの神田で収穫された御米、二見の御園で栽培された野菜と果物、二見の御塩浜で調整された堅塩などが用いられ、また、御水は毎日未明に外宮境内の井戸から汲んでくるという。当日の動きを次の引用に見てみよう。

前夜から身を清めて奉仕する神職（禰宜以下五名）は、当日朝（五時、冬期は六時）、忌火屋殿で木を擦り合わせて火をおこし、蒸した御飯を、素焼の土器にトクラベの葉を敷き、その上にこもりと盛り付けます。また、野菜や果物も形よく切って四寸土器に盛り、さらに干魚は数枚重ね、海藻も高く盛られます。（二三頁）

このように朝五時（冬期は六時）から準備が整えられていくが、調理や素材をできるだけ天然自然の状態に維持することが大切にされていることが分かる。そして、この後の動きは次の引用のとおりである。

このように準備した御饌が辛櫃に納められますと、毎日朝夕、春夏（新曆の四月～九月）は朝八時と夕方四時、秋冬（十月～三月）は朝九時と夕方五時、当番の神職さんが忌火屋殿の前でお祓いを受けて御饌殿に向かいます。そして御饌を捧持する禰宜が、刻階段を昇って殿内へ入り、各御神座の前に御饌を供えて一たん退出し、階下で祝詞を奏上して八度拜を行い、神々が食事を終えられたころ、再び昇殿して御饌を撤下することになっています。（三二～三三頁）

このように千数百年に渡って続けられている「日別朝夕大御饌祭」に、日本人である評者も感服するところであるが、外国人の目にはどのように映るのであるのか。この点、氏の次の体験談が参考になるので、参考に引用しておく。これは、平成十一年秋、世界文化遺産の京都会議に記念講演のため来日した世界銀行副総裁のイシユマル・シエラデルディン氏（エジプト出身）

が神宮参拝を希望し、所氏がその案内役を頼まれたときのエピソードである。

そこで、前泊して翌朝、まず外宮の忌火屋殿近くで大御饌祭の準備と参進の様子を見てもらいましたところ、もうそれだけで非常に感銘したといわれました。

それは、おそらく毎年、ラマダン（断食月、イスラム太陰曆九月）に昼の太陽が出ている間、飲食しないで禁欲し、食物に感謝するイスラム教徒の同氏にとって、日本人が千数百年も前から毎日朝夕、大神さまに心をこめて御饌を差し上げ感謝していることに、深く共感されたからだろうと思われる。（三三頁）

イスラム教徒の同氏のラマダンの体験を引き合いに出しつつ語る氏の指摘は、比較文化論あるいは比較宗教論の視点からも非常に重要で興味深い。ここで日本、イスラム双方に共通しているのは、「食物に対する感謝」という点であるが、これは単に物

質的な恵みへの感謝という点にとどまらない。むしろ宗教的・精神的な深みから来る感謝という点において両者が響鳴し合っていると言えるだろう。人間存在の基礎となる「食物」を契機に対話の可能性が生まれることの比較文化・比較宗教論的、さらに人間学的な意味は大きい。

#### 式年遷宮の成立

いよいよここから式年遷宮の歴史を見ていくことにしよう。氏によると、遷宮の制度は、第四十代の天武天皇が立案し、その崩御により皇后であった持統女帝が初めて実施したというのが、神宮の古伝であり、今日の通説である。内宮の遷宮が初めて行われたのが、持統天皇四年（六九〇）で、外宮はその二年後の同六年（六九二）であるというから、実に今（二〇一四年）から千三百年以上前に遡るといふことだ。近現代の遷宮の周期を見ると二十年毎となっているが、過去南北朝期等には二十年毎に遷宮を齎行できなかったこともあるようだ。そんな状況下で活躍したのが民間の僧尼達であるが、それに関しては後ほど見てみよう。

ここでは、なぜ二十年毎に遷宮を行うことになったのかという点を、氏の議論に従って検討しておく。従来諸説あるものの、古代に中国から朝鮮を経て伝わった暦法（太陰太陽暦）をもとに、太陰暦の十九年に七回閏月を加えれば太陽暦の十九年と一致してズレを調整できることから、満十九年（教え二十年）で一周期、という当時最新の科学知識が参考にされた可能性が高いと氏は考えている。氏はそれに加え、むしろ結果的に二十年というサイクルをよしとする経験の知恵が制度化されたことにこそ意味があるのだろうとしている。

前半の暦法を根拠とする見解であるが、以下に評者の意見も若干述べておきたい。式年遷宮の発案者である天武天皇は、日本初の天文台（占星台）を設置したことでも知られている。評者の見方では、道教に精通していた天武天皇が最新の科学を取り入れていたということは十分考えうることである。ちなみに天武天皇は『古事記』及び『日本書紀』の編纂を命じたことでも知られており、国内的にも対外的にも古代日

本文明の発展の礎を築いた天皇と言えるだろう。また、ここでは詳しく見られないが評者は、皇位継承のシンボルである「三種の神器」継承の制度が政治的に定められた時期も天武天皇の時代ではないかと見ている。神器のうち「八咫鏡」の本体が伊勢の神宮に祀られているとされる。今回本書で取り上げられている「式年遷宮」の制度を発案した天武天皇を中心に古代史を考えることで、本書の理解がより深まるのではないだろうか。読者にはこの点に是非注目していただきたい。

#### 遷宮の中断と民間奉賛

先ほど南北朝期等に二十年毎に遷宮が齎行できなかったことに触れたが、ここではその背景を詳しく見てみよう。氏によると、南北朝期に入ると、朝廷の威力が弱まり室町幕府も内紛によって不安定であったため、造替の費用を十分に調達できなかった。そのため遷宮が徐々に遅延していった。そして、戦国時代に入ると、外宮では永享六年（一四三四）、また内宮では寛正三年（一四六二）に遷宮が行われて以後、

どれだけ殿舎が朽ちても造替することが難しくなり、やむなく何とか仮殿（修理）遷宮で済ませられたという。

そんな中、神宮のために立ち上がった人々が、民間の僧尼達であった。まず、橋の架け替えから始まった。やがて志を継いだ尼僧・慶光院清順上人は、外宮の百三十年ぶりの遷宮に尽力したという。内宮の方は、慶光院の志を継いだ尼の周養上人が天正三年（一五七五）、まず正殿の仮殿遷宮にこぎつけた。次いで織田信長や豊臣秀吉の協賛を得て勸進を続け、同十三年（一五八五）の内宮及び外宮遷宮の大きな力となったという。内宮の遷宮は一四四年ぶりであった。

氏は、これを機会に従来は内宮の二年後であった外宮の遷宮も、内宮と同年に行う先例が開かれた点に着目している。さらに江戸時代初期に入ると、従来の二十年目（満十九年）よりも一年長い二十一年目（満二十年）ごとに、八年間準備して遷宮が行われるようになった点を氏は強調する。徳川政権下の安定期が開かれたことがよく伺われる事例であろう。

#### 神嘗祭と式年遷宮

本書のまとめの前に氏は、神嘗祭と式年遷宮の関係に触れている。神嘗祭とは神宮だけの特殊な祭典で、古来最も重要視されてきたという。この神嘗祭は、旧暦九月、新暦十月の中旬に、内宮と外宮のすべて（百二十五社）で執り行われ、その趣旨は「秋に収穫された新穀の、お初穂」を、真っ先に伊勢の大神さまにお供えし召し上がって頂く大祭」（五一頁）というものである。

一方、神嘗祭と式年遷宮との関係はいかがであろうか。詳細に関しては本書の一読をお勧めしたいが、式年遷宮は、毎年十月に行われる神嘗祭とほぼ同趣旨の大祭であるということだ。氏は式年遷宮祭を「大神嘗祭」と述べており、これは理解の手助けとなる表現であろう。

#### おわりに

ここまで、本書を順に辿ることによって廣池千九郎の『伊勢神宮』及び『伊勢神宮と我国体』の成立過程と史的意義を見てきた。その上で、所氏の議論をもとに伊勢の

神宮に伝わる「伝統継承」の精神を概略的にはあるが見ることができた。評者の読後の印象として、本書は本文六一頁とコンパクトにまとめられているが、内容的には非常に深く、廣池千九郎の神宮及び国体の研究、さらに式年遷宮の歴史的意義が評者に非常に重く響いてきたことを記しておく。最後に、氏の注目するソフト・パワーとハード・パワーという側面から、神宮に伝わる「伝統継承」の精神の現代的意義に触れ、書評の筆を置くことにしたい。

氏は、社会の流れも遷宮と同様概ね二十年を周期に変化してきていることを指摘する。本書では、明治から今日に至るまでの歩みをもとに、ソフト・パワー（道徳・教育・文化など）とハード・パワー（政治・経済・軍事など）の二つの側面が交互に続いてきたという考察が展開されている。そのバイオリズムから、第六十二回の式年遷宮以降は、ソフト・パワーをベースにハード・パワーを発揮することが必要になりそうだという氏の議論は、日本文明論や日本文化論を考える上でも非常に興味深い。さらに氏は「しかしながら、その根底に神を

敬い人を思いやり互いに助け合う、日本的なソフト・パワーの伝統がなければなりません」(六一頁)と述べ、それを受け継ぎ伝えていく知恵を神宮から学びたいとし、本書を締めくくっている。

ハード・パワー面である近代的科学文明が発展した現代だからこそ、内なるソフト・パワーの在り方をもう一度検討する必要があるように感じるが、重要なのは何を受け継ぐのかということである。悪習を継承したのでは、人々に苦しみが残るのみで発展性は見込めない。この点を考慮しながら、互いに試行錯誤し続け、未来を拓く知恵を次世代へ継承していくことが求められる。そうすることによって、神宮に伝わる「伝統継承」の精神の現代的意義が真に発揮されることになるであろう。

〔モラロジー研究所、二〇一三年〕

(東日本大震災から三年後の

平成二十六年三月十一日(火))